

「私は、今度の調査で、八田野や北滝沢だけでなく、たくさんの村でたくさんの人々と話した。その人たちは、みなこの用水に期待をいただいている。農民にとつて、水はいのちの次に大切なものだ。だから、この仕事がいかに大切かが身にしみてわかった。同時にこれがお城のためにもなる。こんなすばらしい仕事ができる私は本当にしあわせ者だ。」

聞いているれんの耳には、夫おとのことばが水のしみこむように入ってきました。れんは、自分もしあわせだなあ、と思いました。

「私は若いころから、他人のやらない計算を自分のためにやってきた。人のできない計算をできる喜びを感じてきた。それが得意だった。しかし、今はちがう。自分が得とくをするとか損そんをするかではない。私の身につけた計算の力は、もつと大きなもののために使わなければならない。私の肩かたには、今、多くの人の運命がかかっているような気がするのだ。」